

ツイッターライブノベルズ

戦獄 ZERO

大槻エリナ編 上

「しれなげ、
読んでも意味わからねえー」(怒)
「この大槻の『戦獄』の物語は
リアルな感じがするよ」
はははは...

SENGOKU PROJECT



プロローグ

※ ※

・・・ここはどこだろう。エリナは首を傾げる。

さっきまで、いや、たった今まで、自分の部屋にいた・・・そのはずだ。

今、彼女の目の前には、真っ赤な壁のようなものがそびえ立っている。

壁は、左右にゆくに従い、ゆったりとした丸みを帯びている。

少し離れてみれば、それが壁ではなく、柱だという事がわかる。

巨大な・・・柱だ。

大の大人が二抱え・・・いや四、五人がかりでやっと抱えられるほどの大きさである。

その巨大な質量のものが目の前に、しかも、何本も立ちならび、

無言でエリナを睥睨しているのである・・・。

※ ※

大槻エリナ

今日は、8月ももう終りだというのに、やけに暑い一日だった。

何十年かぶりの異常気象のせいだとTVニュースでは喋っていたが、

この暑さは本当に今年だけの話なのだろうか・・・と、エリナは思う。

年々と暑さが厳しく感じられるのは、進んでいるという温暖化のせいだろうか・・・。

それとも自分の肉体から序々に失われている「何か」のせいなのか・・・。

大槻エリナ24歳。まだまだ若い、というべきだろう。

しかし、それゆえにTVCMや雑誌でも頻繁に取り上げられている化粧品の広告、

特に過剰とも思える肌にひりつく紫外線の強さへの警告とでも言うべき文章には、

確実に意識のアンテナが反応する。

暑さと比較して、暦通りにめっきりと激減した蝉の鳴き声が、

夏という季節の終りを感じさせてはいる。

生命の源である太陽のエネルギー、それが最も強い季節であると同時に、

そこで育まれた命なり力なりが、その盛んさゆえに、

その終焉をも予感させるという矛盾を抱えた季節。

蝉たちの鳴き声が弱まってゆくのと同時に、無意識のうちに人の体もまた、

照りつける陽射しの中に、力そのものの衰えを感じているのだろうか。

儚さ、といってもいい感情・・・それが漠然とした不安に転じているのかもしれない。

エリナはここのところ、不意に正体のわからない不安を感じる事がある。

それは具体的に何が・・・と、はっきりしたものではない。

季節の変わり目だからという事とはまた別の、何か・・・。

それ自体、ごく微かな「もやもや」したものに過ぎないものではある。

しかし、それはアスファルトを割いて生えている雑草の如く、確実に自分の心に根を張り、小さいながらも序々に、そして確実に成長してゆくもののような気がするのだ。

彼女は都内で両親、そして高校二年になる妹と暮らしている。

今風で、奔放なところもある妹とは、年がやや離れているせいか、覚えている限りでは姉妹の間で喧嘩らしい喧嘩をした記憶がない。

両親の間も、世間一般と比べて格別仲がいいというわけではないのだろうが、これまで大きな問題にも当たった事がなく、過程は円満、とっていいだろう。

自分自身もこれまで家庭内でトラブル源になった事はもちろんない。

それなりに有名な・・・いわゆる「いい大学」を卒業し、

現在、大手メーカーの宣伝部に勤めるエリナは、

両親にとって手の掛からない「いい娘」なのだろう、と思う。

明るい性格、気配りができて、仕事も早いと、勤務先での評判も悪くない。

格別に美形というほどではないが、愛らしいといえる外観と性格にイメージの誤差がないと、学生時代から常に異性同性問わず、それなりに人気があった。

もっとも、ルックスでいえば、妹のアイカの方が華やかだと彼女は思っている。

はっきりそういった話を妹とした事がないが、きっと学校でもモテるのだろうと妹ながら、羨望を感じた事もある。年齢が近ければきっと「妹を紹介してくれ」と頼まれる事も多かったのではないかと、彼女自身、思うほどだ。

ただ一方で、華やかさは、つまり明確さである。そういった輪郭のはっきりしたものは、

人によって好みが分かれる事がある。それ故の脆さも、身内としては感じてしまう。

その点では、ルックスにおいて、彼女のそれは妹のそれとは種類が異なるものだろう。

「お姉は好感度が高いからナ～」と、妹がぽつりと言ったのが的を得ているような気もするが、

彼女自身は単に、嫌われにくいタイプというべきなのかもしれないな、

などと人事のように、あっさり考えている。

深く、一本気な恋愛よりは、異性同性、あるいは年齢すら関係なく、

多くの人と仲良くつきあう事に、彼女自身も楽しみや喜びを感じている。

もちろん、そういった付き合いを超えて、異性から誘われた事も一度や二度ではない。

ただ、エリナ自身は特に現在・・・社会に出てからは特定の恋人はいない。

特に恋愛について晩生というわけではないのだろうが、あまり積極的ではないというか、

その手のことについてはむしろ、鈍感といった方がいいだろう。

とにかく今は、エリナにとって今の仕事をする事は、恋愛するよりも刺激的で、

楽しく充実した毎日なのである。

ジレンマ

「優等生」・・・自分ではそれほどでもないと思うのだが、

ちよくちよく他人から受ける評価は、それである。

これまで大過なく生きてきたと言っても過言ではない。

むしろ、エリナは今、自身も驚くほどに順調な社会生活を送っているのだ。

・・・だからかもしれない。

そう、エリナは思う事がある。ここまでが順調すぎ、出来すぎているのだ。

「このまま順調にいけるはずがない」と、ふと思ってしまう事がある。

もちろん、そうでない事に越したことはない。

だが、一生の中で使える「好運」が決まっていたとしたら、

自分はかなり前倒しにそれを使ってきてしまったような気がして、

意味も根拠もないにも関わらず、漠然とした不安を感じてしまうのだ。

自由気儘に行動する妹を見ていると、なんだか羨ましくなったりする。

しかし、とって自分にとっての「自由」とはなんなのか・・・

そう自問してみたところで、今のエリナには、

適切と思える解答もまた、見つからないのだった。

このままでいいのだろうか・・・心のどこかで自分自身の変化を求めている。

不安を払拭するために必要なのは、きっとそれだと思う。

だが、変化するために、具体的にどうすればいいのか・・・。

自分の望みはわかっているのに、そこに至る方法がわからない・・・

エリナの心の奥底で息づいていたジレンマが、時折、心理の表層にぽこん、

と浮かんでくる・・・。

ひっそりと、ゆっくりと、湧き上がる「泡」のように、今・・・。

ぽこん、ぽこん・・・と、微かな音をたてて、それは弾けては、消える・・・。

ある夏の日

暑い一日を乗り切った仕事終りには職場の同僚の誘いを断って、前々からの約束・・・学生時代の友人たちと会い、盛り上がった。

懐かしい、というほど彼らと共に過ごした時間は過去のものではない。

しかし、社会に出て会う頻度が減ったのは間違いがない。

久しぶりに彼らと顔を合わせるの、やはり楽しかった。

社会に出て何年にもなるのだから、結婚したものもいるし、もう子供がいるものもいる。

話し言葉はもちろん、生活習慣もお互いに学生時代とは大きく変っている。

しかし、顔を合わせた途端に当時の気持ちに一瞬で戻ってしまうのは、共有した濃厚な時間があるからこそなのだろう。

当時の話をするのも楽しいし、今、どうしているかを報告しあうのも、やはり楽しい。

しかし、得てしてそんな時間はあっという間に過ぎてしまうものだ。

以前なら朝まで語り明かしたかもしれないが、流石にそれを慎む年齢になっている。

彼らと別れて、自宅に帰りついたのはまだ、時計の針がてっぺん・・・「12」を指すにはまだまだ余裕のある時間だった。

妹と母親が進路について言い合いをしていたが、話に加わると長くなりそうなので、適当に二人をかわしてシャワーを浴びた。

友人たちがくれた、楽しい気分の高揚は残しつつ、それなりに酔いは覚ますことができた。

バタンと、ベットに倒れ込んだ際の、ふわりとした感触が心地よかった。

僅かにアルコールが残っていたのかもしれない。

しかし、エリナは悪酔いする性質ではない。

もちろん、幻覚を見るほど呑んだわけでもない。それなのに・・・。



赤い壁・・・圧倒的な存在感をともなって、巨大な柱が目の前に、屹立している。

やけに薄暗い。その暗さの中で、柱の赤・・・朱色というべきだろうか・・・が一際、目立つ。色といい、形といい、例えるならばそう、鳥居の足の部分、とでも言えばいいのだろうか。

ただ、鳥居だとすれば、途方もなく大きい。

どんなものでもそうなのだろうが、巨大であるという事はそれだけで、威圧感を伴うものだ。目の前の柱は、エリナを圧倒する。

柱にそって、自然に上部を見上げたエリナは、更に、絶句する。

見慣れた鳥居の上の部分、つまり水平に組み合わされた天井部・・・エリナに知識はなかったが、鳥木や貫と呼ばれる構造物・・・が、その柱にはついていなかった。

しかし、あるべきものがないという違和感よりも、彼女を絶句させたのは、柱そのものの高さの方だった。

何もない無表情な、ただ真っ直ぐな柱・・・それがひたすら上に向かって、伸びている。

しかし、柱がたどりつく終着点・・・天井などの構造物はさっぱり見えない。

柱の伸びていく先は周囲の薄暗さが更に増し、漆黒の闇となっているのである。

その闇がもし、夜空ならば柱の上部はシルエットとなって浮かび上がったかもしれない。

ところが柱の伸びて行く先には、明るさなどかけらもないのだ。

柱そのものが闇に溶け込む、あるいは闇に吞まれる、そう表現するしかないような消失の仕方をしているように見える。

一体、どれほどの高さがあるのだろう・・・とにかく高い。

なんだか自分が小人になってしまった気がする。

そして、それはこの柱、1本に限ったことではなかった。

エリナの目の前から見える範囲全てにわたって、同じような柱が無数に立っていた。

見たところ、ずっと奥までそれは並んでおり、
その先が一体、どうなっているのか、全く見えないほどの本数なのである。

その全ての柱が、手前のものと同様に、太く、そして、高い。

第一の着信

落ち着いて見てみると、どうやらこれらは一定の間隔をもって規則的に並んでいるようで、
雰囲気としては、昔修学旅行で訪れた、
鳥居が無数に立ち並ぶ京都の神社のそれに似ている。

しかし、これが鳥居ではないのは確認済みだ。

つまり、ここが神社なわけではない・・・ただ・・・漂う雰囲気は、
やはり、神社のそれに似ている気がする。

静かで、そして厳かな・・・
まさに今、周囲にただよう空気はそれに似ているように感じる。
単純に柱の色が赤、いや、朱色なので、
そこに自分の持っていた似たイメージを重ねてしまっているだけなのだろうか？

鳥居のように前や後ろという方向性がないので、どっちを向いても同じ風景が広がっている。

気をしっかり持っていないと自分がどこにいるのかわからない錯覚におちいりそうだ。

まるで・・・そう、合わせ鏡の中にいるような不思議な、落ち着かない気分だ。

風景のシンプルさが、逆に不気味な感じを醸し出しているようにも思える。

構造物である以上、先へ歩いていけば、壁なり何なりに行き当たりはするのだろう。

しかし、今、エリナがいる場所からは柱の重なりが視界の中で邪魔になって、
突き当たりらしきものが見えない。

それが現れるのがどれほど先なのか、さっぱり計れない。。

エリナはふと、思う。

突き当たりなどないのではないか・・・。

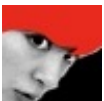
そんな筈はない。
そう思いたいのだがエリナの中の本能、
あるいは直感ともいえる部分が、そう告げている。

延々と広がる柱の荒野・・・。

あるいは、巨人の監獄・・・。

その想像に、エリナはぞっとする。

と、同時に、いきなり場違いなメロディーが響きわたる。



「・・・ッ!？」

エリナは、驚きのあまり、腰を抜かしそうになった。

これ、携帯の・・・？

そう、携帯の着信音だ。

エリナはその時はじめて、携帯電話を握りしめているのに気がついた。
そうだ・・・！

エリナの頭にフラッシュバックのように記憶の抜け落ちていたピースが浮かび上がる。

抜けたピース

唐突に目の前に出現した異界の風景に圧倒されて、論理的に現状を把握する思考が停滞していたのだ。

そう、部屋でベットに着地し、一息ついた時に、携帯に着信があったのだ。

着信音の種類を使い分けているので、音だけでそれがメールの着信だとわかる。

このまま寝てしまおうと思っていたのに・・・
ベットの心地よさから抜け出す事を、体が拒否しているのがわかる。

体からの信号に従って、気付かなかった事にしちゃおうか・・・

しかし、迷ったのは一瞬だった。

時間が時間である。
何か急ぎの用件だったらやはり、確認しておかなければならないだろう。

優等生と呼ばれる所以なのかもしれない。

起き上がり、机の上に置いてあった携帯を手にとり、画面をエリナは開いた。

確かにメールの着信表示がある。

しかし、続いて開いた画面には、表示される筈の送信先の相手の名前がない。

スパムかな、と思った瞬間には、携帯の画面にいきなり、大きな☆型のマークが浮かんでいた。

何だろう？

そう思う間もなく、突然、その☆型は輝きはじめていた。

それは、凄まじい速度で光量を増し、あっという間に液晶画面いっぱい広がる。



「きゃっ！」

小さく悲鳴を上げたエリナは反射的に、携帯の画面を閉じようとした。

しかし、閉じようとした自分の手が、携帯から発せられる光の中に吞み込まれていく。
光は、熱さをともないつつ、視界を真っ白な闇へと変えていく・・・。

エリナから前後左右どころか、上下感覚をも奪う光の渦・・・
その中にずいぶんと長い間いたような、逆に、瞬きする間もなかったような・・・
急速に落下していくような感覚に襲われて、

そして気がついたらここにいたのだ。

エリナは曖昧だった記憶の一部を取り戻し、自分の置かれている状況を理解は、した。

夢・・・？

まず最初に考えたのはそれだ。非現実的な風景の中にいるのはわかる。

とまり、視覚はそれが現実ではあり得ない、どう考えても夢だ・・・と訴えている。

しかし、その他の感覚がエリナに否、と告げているのだ。

踏みしめる床の固い感触。

目の前の柱の存在感。

肌に感じる、わずかな風・・・空気の対流する感触。

夢にしては、やけにリアルな感覚がある。

これまでの人生で見た夢の記憶、感触とはまるで違うのだ。

では、これは現実なのか・・・。。

ぞわり・・・。

エリナの背筋を、冷たいものが通り過ぎる。

※続きはSENGOKU-MON-大槻エリナ（中）にて無料で楽しみいただけます。

尚、この話はノンフィクションです。
登場人物である大槻エリナは実在する人物です。
ツイッターで大槻エリナの「今」をご覧ください。

http://twitter.com/otsuki_erina

http://gree.jp/otsuki_erina